

書 評

片 茂永ほか9人共著
『宗教と祖先祭祀』

金 泰順*

本書は韓国文化観光部選定2006年度優秀学術図書を受賞した図書であり、最近の韓国社会における伝統と現代という当面の課題を取り扱い、示唆に富むものである。1999年度の統計庁の統計によると韓国の宗教人口は全国民の53.6%であり、仏教26.3%、プロテスタント18.6%、カソリック7.0%、その他が1.7%である。一神教である基督教人口が33.3%を占めているため、宗教と祖先祭祀の葛藤は深刻な社会問題となっている。よって、各宗教団体は宗教の枠内で祖先儀礼を合理化する方法を模索する事となる。儒教伝統社会から続いてきた祖先祭祀である「祭祀」をどのように解釈するか、また、どのように受け入れたのかを分析したのが本書の特徴である。

本書の構成は次のとおりである。

序

- 第1章 宗教と民俗—理論と実践の方法的考察
- 第2章 宗教と祖先祭祀—総論
- 第3章 薦度齋キョンドジョに投影されている儒教の祭祀理念
- 第4章 仏教祭礼の意味と行法
- 第5章 仏教式家庭祭祀の奉行に関する実態調査と研究
- 第6章 奉安堂と仏教祭祀
- 第7章 初期の韓国プロテスタントと祭祀問題
- 第8章 韓国プロテスタントの追悼式の現況
- 第9章 伝統的な忌祭祀から追悼礼拝への転

※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科

換過程

- 第10章 ‘韓国のカソリックと祖先祭祀’に
関わる歴史民俗学的な接近
- 第11章 天道教の祭祀民俗誌
- 第12章 在日韓国基督教の祖先祭祀の実態
後記

第1章の中で筆者は、宗教と民俗という問題のカテゴリーの成立過程を、ヘーゲルの弁証法を取り上げ論じている。宗教(A)と民俗(B)の統合は同質のABになるか異質のCになるかというのは形式的な論理である。それは結果論的な答えを要求しているように見える。このような問題はヘーゲルの論理である運動の思惟方法としては適用されない。ヘーゲルの論理は止揚も運動である。運動というのは必ずしも必然的な運動ではないので我々の前に現われる現状は偶然として現われる。よって、宗教(A)という真理の固定性と民俗(B)という非固定性と統合はABかCかという固定的な答えはできない。ABかCかというカテゴリーは未知数であり、専門家たちの固定観念からは外れているのである。なぜならば文化接触は始まる瞬間から存在性は過去であり、現在の現状としての変化し続ける進行形であるため、予測外の現状になる。宗教の固定というのは宗教的な‘理’が固定という意味であり、‘史’はそうでもない。その理由は‘史’というのは過去と現在が同じではない事を前提として存在するからである。宗教史は宗教の変化を前提とするものである。言い換えると、宗教が不変の真理を前提にすると宗教史の存在は不可能である。よって、宗教の固定と非固定がそれぞれ非固定的な民俗の前に置かれることである。

その中で、宗教的な真理、‘理’は時空を超越した連続性として、非連続性の民俗と一つになる事が可能であろうか。それは現実的には不可能であろう。宗教の固定的な真理が非固定的な何かと一つになるというのは徹底的な自己否定であり、宗教的な真理は一瞬で無になるのだ。

そうすると残っているのは宗教の歴史、宗教の非固定性が同じく非固定性の民俗と合うという結論になる。

異質的な宗教と民俗が同質になるというのは不可能であるように見えるが、実際にはそのような現状が存在しており、可能であるのは事実である。それを可能にするのが‘媒介体’である。その媒介体が‘親縁性’を有するときスムーズになる。この親縁性的な媒介体は、宗教民俗という文化現状で受動的という出発点と能動的という過程を生み出し、今回の論議のなかで重要なカテゴリーになる。

キリスト教と非キリスト教の間の理念の構造的な差が偶然的な民俗に混じっているのがその例である。例えば、正月や秋夕(盆)に二つの類型の人たちが同じ場所に集まる事は可能でもあり、不可能でもあるが、このような現状は媒介体の存在次第である。

第2章 「宗教と祖先祭祀—総論」では、現在までは発表された論文を取り上げている。祖先祭祀に関わる論文は次のように二つに分類される。

連続的

生命, 家族の理想的な	非連続的
永遠性	イデオロギーに関わる
伝統性を主張	時代性
祭祀の消滅による生の不安	社会的な機能を主張
	祭祀の消滅による社会的な不安

これらの論文は共に祭祀の変化による問題の提起はしているが、現場研究がないと指摘している。

筆者は「宗教と祖先祭祀の出会い」という段落のなかで第3章以下の各章の内容を紹介している。

第3章 「薦度齋に投影されている儒教の祭祀理念」では現在、韓国の寺刹で見られる二つ

の新しい様相を取り上げ論じている。

- ① 儒教の祭祀(祭祀)という民間儀礼と薦度齋としての仏教儀礼を仏教儀礼の中で一つに統合している。
- ② ‘死亡者の極楽薦度’という目的の四十九齋が本来の目的から離れ、脱喪という脱宗教的な性格の儀礼として変っている。

①のような現状は追慕儀礼としての祭と薦度儀礼としての祭を一つの儀礼として統合し、薦度と追慕を包含している必要充分条件の儀礼として成立させている。

②のような現状は、現代韓国社会において三日・三虞祭の脱喪は短すぎるし、百日脱喪は長すぎるという事を調節したものであり、真ん中の四十九齋をちょうどいい脱喪儀礼として位置付けている。筆者は血縁中心の生活倫理としての儒教の祭祀が、超越的な存在の介入した宗教倫理としての仏教の祭祀となった成立過程を取り上げ説明している。

なお、死を六道輪廻の過程として説明する仏教の死後世界と、この世の中での連続性として説明する儒教の死後世界が一つになるという矛盾点は死後世界の永続性の追求という民間の精神世界の基盤上に成立されている。

第4章 「仏教祭礼の意味と行法」では、韓国の寺刹で行われる「施餓鬼会」を中心として論じている。まず、衆生の輪廻転生(六道輪廻の意味)を①生有(母体によって生まれる時の識身)②本有(生まれてから死ぬまでの識身)③死有(死ぬ時の識身)④中有(死んでから再び生まれるまでの識身)の四有として説明している。なお、中有は人が死んでから次の生を貰う期間までの識身であり、インドではPreta、漢訳経典には逝者(いくひと)と言われている。Vedaの「Grhya」によると人が死ぬと祖霊界に行って祖先霊(Pitr)になるが、祖先霊(Pitr)になるためには子孫によって行われる祖先齋が必要である。仏教経典でもPretaは餓鬼、逝者

(いくひと)として死んだ人の魂を称する。「施餓鬼会」は餓鬼に食物を施すという意味を持っている。よって、祭式主義について否定的な観念を持っている仏教儀礼を合理化した。韓国仏教の初期經典によると施餓鬼会は地面に小豆をまくか流水に食べ物を投げ込むか食べ物が入った食器を持って念仏を唱えるなどの方式で行われていた。このような現状により、韓国の仏教はインドの民間信仰を受け入れた事は明らかである。

第5章 「仏教式家庭祭祀の奉行に関する実態調査と研究」では仏教が儒教の祭祀(祭祀)をどのように受け入れ、いかなる形で変化させたのかを考察し、現場を中心とした事例を取り上げている。現在、韓国仏教の寺刹運営は盂蘭盆、祖先祭祀、薦度齋などを中心として運営されている。しかし、寺で行う祖先祭祀と共に家庭祭祀も勧めている。曹溪宗をはじめとした、いくつかの韓国の仏教宗団では家庭の中で行う仏教式の祭祀のテキストを発行し、普及させている。仏教式祭祀は伝統的な儒教式の祭祀とは異なる。食べ物は生前、故人の好きなものを中心とするが、ナムルや果物、餅を中心として、出来るだけ肉類は使用しないこと、酒の代わりに茶を使用すること、左右に菊の花のような素朴な花を供養することなどを勧めている。

第6章 「奉安堂と仏教祭祀」では、葬儀風習が現在変化している韓国の葬儀文化にあわせ、葬儀文化の転換を計っていることについて取り上げている。埋葬の風習は人口増加や住宅難などの社会問題に従って火葬文化として転換している。寺はそれに応じて納骨堂と同意の奉安堂を設置して霊塔を造成している。霊塔の機能は火葬文化への変化に対する社会的な問題を受容しようとする仏教の布教意識である。よって既存の寺は変化している。霊塔を造成して奉安堂を中心とした運営や、儒教の祭祀を受け入れながら仏教式の祭祀を行う。霊塔のない寺は

大雄殿のなかで霊駕を奉安して薦度齋を行っている。霊塔の仏教的な意味は過去や現在ではなく未来にあり、結局、霊塔に安置された祖先は自分の未来の象徴でもある。

第7章 「初期の韓国プロテスタントと祭祀問題」では初期のキリスト教団が祖先祭祀を偶像崇拝と見做して禁止させたが、そこで、発生したもろもろの問題を取り扱っている。

生前の親孝行を誘いながらも祖先儀礼に関しては否定的な立場を取った。初期のキリスト教は親孝行と上帝(GOD)の崇拝は並行するべきであるが、親の恩というのは上帝の恩に由来しており、親孝行より上帝崇拝が優先である事を主張した。まだ、祖先祭祀に関わるキリスト教の立場は、イエスがすでに自らの体を供物として祭祀を行って、それ以外の祭祀は必要ではない、遺物に過ぎないと述べている。しかし、韓国人の心の中に深い根を張っている祭祀を廃止するのは難しく、キリスト教を伝道するには代案が必要になった。その結果韓国人指導者たちによるキリスト教的な孝道神学が積極的に紹介され、土着化した追悼式が誕生する事となってきた。

韓国教会が発展させた親孝行の神学は既存の親孝行の概念の上に、受容と廃止という二重の方法を採択することとなった。つまり、葬儀は、伝統儀礼のうえにキリスト教的な儀礼を接ぎ木する形になった。

第8章 「韓国プロテスタントの追悼式の現況」では、追悼式あるいは追悼礼拝という形の‘プロテスタント式の祭祀儀礼’の事例を取り上げて説明している。儀式はプロテスタントの宗派によってやや違いがあるが、その準備は大体次のようである。

- * 祭祀を行う日は故人の死亡日を選ぶ、もしその日が主日(日曜日)の場合は前日にするか他の日を選ぶ事、時間と場所は家族の相談の上で決める。
- * 追悼式の範囲は直系に限ったほうが良

い。

- * 追悼式は父系と母系を含んだ祖父、祖母の2代までがお勧め。
- * 故人の身近な親戚や親知に知らせをしても良い。
- * 故人の写真や略歴、生前の肉声、録画したものなどを用意したほうが良い。
- * 祭壇の飾りをする際は、テーブルの上に故人の写真を置き花で飾ることも出来る。
- * 食べ物を用意するが、テーブルの上に供えてはいけない。

追悼式の順番は礼拝形式とほぼ同じである。開式辞（主礼者による）→祈祷→賛唱→聖書奉讀→説教（牧師）→祈祷→追慕（故人の略歴紹介など）→賛唱→祝福祈祷（牧師）プロテスタントの教理から見ると伝統的な祭祀は排除されるべきなのだが、追悼式という名前と形態として残されている。韓国人は韓国の伝統文化から完全に離れることが出来ないからである。

第9章 「伝統的な忌祭祀から追悼礼拝への転換過程」では、現在、儒教式の祭祀を追悼礼拝に変換させた過程を、牧師である人と筆者との対談形式で記している。筆者はいくつかのテーマに分けその内容を採録した。そのテーマは次のようである。

- * キリシト教を受け入れる前の話者の家系の周辺
- * キリシト教を受け入れた後の話者の周辺
- * 祭祀を追悼礼拝に変換させた後の話者の周辺
- * 祭祀と追悼礼拝に関わる話者の意見

の四つのテーマである。ここでは昔の祭祀風景が見られる事以外に、眼鏡についての昔の人の考え方をみることが出来る。眼鏡は日本統治時代に入ってきたが、同時に目上の人の前で眼鏡と掛けていると生意気な者とみなされた。よって、祖先の前では眼鏡を外してから儀礼を行

った。祭祀の意味は祖先の魂霊が子孫の家を訪れるため、扉を開け、食事をするときの時間を決め、その間子孫は外で待っていたという。なぜかという目上の人の食事を目下の人が見るのは失礼な事であるからである。本章での祭祀から追悼礼拝への転換過程は、儒教式祭祀→儒教式とキリシト教式の共存→追悼礼拝という過程である。

話者の考えでは祭祀というのは死後孝行であり、追慕儀礼である。

第10章 「『韓国のカソリックと祖先祭祀』に関わる歴史民俗学的な接近」では、カソリックの流入過程と伝統社会との衝突を、カソリック流入時の時代的な背景、布教過程、伝統社会との衝突、宣教師たちの相反した意見などを中心として論じている。

朝鮮後期、性理学の矛盾点の反省の結果、一部の知識人は、実学思想に関心を持つようになった。このとき中国から入った天主学は、祖先祭祀をめぐる伝統社会と衝突することとなった。しかし、20世紀に入ってから現われた国際的な動きや教皇庁の宣教政策の変化は、死者に対し敬意としての儀礼を許容するようになってきた。そのとき韓半島は日本帝国になり、日本人は神社参拝を強要した。韓国のカソリックは天皇の写真の前に敬礼をするぐらいは許容したが神社参拝は拒否した。しかし後日、宣教と関連した問題が発生し、神社参拝を‘混合された礼式’として規定しカソリックは神社参拝を許容することとなった。1962年のバチカン公議会以後、カソリックの土着化の動きが始まり、祖先祭祀の問題は積極的に検討されるようになった。1984年、カソリック200周年記念司牧会議を通して現代に相応しいキリシト教的な祭祀儀式を作るための指針案（手引き）が作成された。

第11章 「天道教の祭祀民俗誌」では、民族宗教である天道教が新宗教としてどのように教勢を広げていったのか、および、天道教式の

祭祀はいかなる形で行われたのかを事例を取り上げて説明している。さらに、彼らの父母や祖先に対する認識を分析している。天道教の中で父母の存在は天と同じ意味であると認識し、祖先崇拜と祖先祭祀は、天を崇拜して祭ることと同様であると考えている。天道教は韓国文化の相当な部分を受容している。特に孝行と人倫を基本として、天と我を同一存在として認識していて、祖先祭祀は天道教教理の重要な部分を占めている。

第12章 「在日韓国基督教の祖先祭祀の実態」では在日韓国東京教会を中心とした実態調査である。在日韓国人の最初の教会は‘東京教会’である。1906年東京でYMCAが創設され、留学生を中心として礼拝が行われた。1919年、3・1独立万歳運動の前の2・8独立運動が東京教会で行われた事は有名な話である。1945年10月には日本各地にいる基督教の代表者が大阪東城教会（現、名古屋教会）に集まり在日朝鮮基督教連合会の設立準備委員会を発足した。このような歴史を持っている在日韓国基督教教会は、民族単体が規定している基督教式の祖先礼拝により、祖先儀礼が行われている。本章の中で筆者はいくつかの事例を取り上げながら分析している。

以上のように内容を簡単に記してみた。

次に本書の全体的な感想を述べる事とした。

祖先祭祀の問題は①記憶としての祖先と②神として祖先、という二つの問題にぶつかる。最近の韓国社会の変貌により、祖先祭祀の認識や儀礼の形は変容している。

最近、祖先崇拜の観念規定に関して、祖先崇拜を、家庭祭祀に主眼をおく追憶主義（memorialism）として区別したのはフリードマンである。彼は分析モデルとしてdomestic levelとLineage levelをたてている。マリードマンによるdomestic levelとは、情緒のないし感情的なレ

ベルでの祖先で、「近い祖先」であり、その属性は崇る存在である。一方、Lineage levelとは系譜的・相続的レベルでの祖先で、「遠い祖先」であり、その属性は守護的な存在であり祖先崇拜をさす。その理論を韓国の社会に照らしてみると、守護的な存在である「遠い祖先」向けの祖先祭祀が、最近は「近い祖先」へと強調されたようにみえる。それは、本書の中で追悼式の形を取っている基督教の祖先祭祀の事例から論議される。故人の略歴や生前の動きを追慕するのは記憶の中での祖先であり、「近い祖先」として強調されている。同時に「遠い祖先」の方は後退している。ほとんどの追悼式は2代の祖先まで行われるが、それは顔の知らない祖先に関してはその意味を付与しないからである。しかし、韓国の場合祖先祭祀は追憶主義と祖先崇拜の両面をもっている。「近い祖先」としての追悼式と「遠い祖先」としての祖先祭祀である「ゼサ」が行われるのが現在の韓国社会なのである。それは、さまざまな視点から論議できると思う。まず、韓国では、‘良くならないと祖先のせい’という言葉があるが、それは韓国人の底辺には、無意識の中で祖先信仰的な何かがあるのではないか。祖先が苦しいとんらかの形で助けを求めていると思うことではないか。逆に‘祖先の助けだ’という言葉もあり、思わず良いことがあると祖先の助けであると思う。このように守護的な存在としての祖先を信じることもある。ともかく韓国人にとって祖先というのは厚い絆で繋がっていて、離れることができない存在として位置づけられている。

しかし、次のようないくつかの疑問点が残っている。

韓国の仏教の場合、この世を六道輪廻などで説明しているが、中有以外は祭祀が必要ではないにもかかわらず儒教の祭祀を取り入れた。日本では親鸞聖人が、自分の死骸を加茂川に流して、魚のえじきにせよといわれた故事があるが、それこそ真に仏教の本来の姿である。空、六道輪廻などの仏教の思想から考えてみると、寺の

墓は意味のないものであるが、現在、韓国の寺は変化しつつある韓国の葬儀文化にあわせ、納骨堂と同意の奉安堂を設置して霊塔を造成している。これは六道輪廻の理論からみると、どのように説明ができるか。

韓国のカソリックの場合、キリスト教的な祭礼儀式を作るための指針案（手引き）まで作成している。しかし、カソリックの煉獄説と、すでにカソリックの中にある死んだ人のための祈祷を、韓国の祖先祭祀に照らしてどのように解釈するのか。

プロテスタントの場合、天国へ行ったと信じている祖先を記憶し、追悼式を行う場合、プロ

テスタント式の来世観に照らしてみると彼らの祖先はどのような意味を持っているか。などである。

参考文献

藤井 正雄著『祖先祭祀の儀礼構造と民俗』弘文堂、1993.

道端 良秀著『中国仏教史全集 第十巻』株式会社書苑、1985

(ソウル民俗院出版、2005年)

新刊紹介

安達史人 著

『漢民族とはだれか—古代中国と日本列島をめぐる民族・社会学的視点—』

現在の中国には、総人口約13億人のうち約92%を占める漢民族と55の少数民族が存在している。この圧倒的多数である漢民族はほぼ中国全土に居住していて、その国土の広さから彼らの言語には地域によって方言があるがそれは同じ民族でありながら互いに通じないほど違うものとなっている。

本書は、漢民族が単なる概念に過ぎず漢民族という民族は存在しないという著者の立場から、漢民族とよばれる人々がこれまでの歴史の中でどのようにして作られてきたのかについて論じられている。また、日本列島の民族についても、江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝国家論」や中尾佐助氏のや

佐々木高明氏らの「照葉樹林文化論」などを用いて中国大陸の民族とのつながりについて論じられている。本書は4章で構成されていて、第1章「倭人と弥生人は同一人物か?」、第2章「漢民族とはだれか」、第3章「漢民族はいなかった!」、第4章「北方民族も漢民族になった!」としてそれぞれのテーマに関係する文献を紹介しながら大陸や日本列島の民族について論じられている。

漢民族についてはもちろん民族とは何かについて考える際において本書は参考になる一冊である。

(高倉健一)

2006年7月刊 右文書院